



第 200 回くらしの植物苑観察会 2015年11月28日(土)

## 参勤交代と菊作りの広がり

## —八戸藩を事例に—

岩淵 令治(学習院女子大学国際文化交流学部 教授)

京・江戸で深まった菊作りの文化は、18世紀後半から19世紀にかけて各地に広がっていきました。地方版の菊の園芸書としては、肥後の「養菊指南草」(1819<文政2>年成立)が有名ですが、今回は、陸奥国八戸藩(2万石、現青森県)の藩士徳武新蔵(150石)が参勤交代で江戸で得た知識をふまえて天明元~4(1781~84)年に作成し、藩士の間で写本が流布した「菊作方覚書」をとりあげてみます。

序文によれば、徳武は江戸に勤番中に菊の技術を会得しようとしたのですが、菊の育成は当時商売となっていたため、教えてくれる人が簡単にはあられなかったと述べています。そのような中で、彼は二つのルートから情報を入手しました。一つは、徳武の居住する八戸藩の渋谷屋敷に近く、有力な育成家や育成家の仲間も存在した宮益町(現渋谷区)の隠居僧栄伝の教えです。つてをたどってこの隠居僧と知り合い、遠来の客で目的も老後の楽しみだということで、特別に伝授してもらうことができたといえます。この内容が第1冊目です。もう一つは、同僚の縁戚にあたる湯長谷藩士と、渋谷屋敷の出入商人の妻からの情報です。隠居僧よりも「こやし・植方」が八戸に適しているという理由から、第2冊目で紹介しています。

内容は、花壇の土とこやしの作り方、種の蒔き方、植える時期、育成中の手入れの方法、花種ごとの育成法、花の名付け方、花の運搬方法、育成の終え方、そのほか育成以外のこととして、笑い話、菊香の法、不老不死の薬といわれる菊茶の法となっています。ちょうど菊育成書の刊行の空白期に作成されているため、刊行書にみられない記述が多く見られる点がたいへん貴重です。

さらに注目されるのは、徳武は江戸の技術をそのままコピーしたわけではないことです。彼は、江戸と八戸の気候・風土の違いに留意し、実践によって取捨選択する姿勢を貫いていました。そして、今までの「御国風」に「江戸風」を加え、菊作りに磨きをかけていったのです。また、八戸独自の黄色い小菊の品種「くりから鬼一口」(別名「八月菊」)は、八戸の藩邸を介して江戸に広まったとしています。

このように、参勤交代を通じて、八戸に江戸の菊育成の技術がもたらされたわけですが、それは一方的な技術の移入ではなかったのです。さらに、八戸の商家の家に残された「植木扱書」は、江戸屋敷出入の庭師より「駿河菊」・「松葉菊」のほか松・桜・椿・サザンカ・蘇鉄・松葉蘭・万年青の手入れを聞いて記したもので、じつは嘉永5（1852）年に参勤交代から戻ってきた藩士にもらったものでした。菊に限らず、こうした参勤交代を通じた江戸の園芸文化の摂取が、全国的に、そして町人層にまで展開していたのではないかと考えています。

.....

**次回予告** 第201回くらしの植物苑観察会 2015年12月19日（土）  
「サザンカの系統保存」箱田 直紀（恵泉女学園大学・名誉教授）  
13:30～15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要

岩淵 令治（学習院女子大学）

## はじめに

- ・ 地方版の菊育成書 肥後の「養菊指南草」（1819<文政2>年成立）
- ・ 参勤交代による文化の交流
- ・ 八戸と菊
- ・ 八戸藩／遠山家と園芸

## 1 「菊作方覚書」

## ① 史料

- ・ 2点の同文の写本（遠山家文書／波々伯部家→苦米地家<50石>→八戸青年会文庫）
- ・ 刊本の菊育成書の“空白期”（平野恵「菊の園芸書を読み解く」『伝統の古典菊』国立歴史民俗博物館、2015）
- ・ 成立過程 八戸藩士徳武新蔵（150石 「花月堂」） 二つのルート

## ② 江戸における菊育成の状況

- ・ 流行の変遷：宝暦より大輪が廃れ、安永より「中菊のよれかゝへ咲」が流行→1785・86（天明5・6）年の頃より 「一重二重の中輪乱咲」が流行
- ・ 仕立て方：1本の花数は8・9輪付くのがよく、2・3輪は国元の「むかし風」で「さみしく見へ」、生花にもならない
- ・ 穴室を使用した3回の種蒔き（寒蒔・翌春の彼岸蒔・三月蒔）
- ・ 芽がでると「作人仲間」が「寄合」、「誰殿ハ生出宜、誰殿ハ不作」「誰の方宜か出、手前ハ宜ハ無之」と葉を見て品評を行う
- ・ 商売としての展開 「御家人・出家」まで「職分」「渡世」として植えているので「假初におしへす」、「仲間の外傳受不致」／寒天で固めた“見本” 謝礼は「作人余力」となる

## ③ 「御国風」と「江戸風」

→取捨選択の基準は、「寒国」や「遠国」という風土、土地の広さ、そして「世間へ対し遠慮」という社会的自制

- ・ 菊作りの「達人」 隠居した八戸藩士白井八右衛門春勝（150石）
- ・ 野菜作りのたとえ：植える時期を「いんけん・さゝけの生出候節」、種蒔きの時期を「春なす種蒔候頃」がよく／「下地こやし致方」も「なす蒔候通」でよい／江戸で芽が出たあとの品評の様子＝「八戸にてなすなひのこことく」
- ・ 肥料の作り方：諸説があるが、検証の上、「江戸・田舎にても」「寒こひ」が最もよい
- ・ 植える時期：仮植＝「八戸土地の耆を以」4月下旬、本植＝従来の八戸のやり方の通り、6月上旬、梅雨入後⇔江戸は仮植が3月、本植が立夏4月（『菊経国字略解』）、
- ・ 種の蒔き方と保持：種蒔きの後、上によしずをかけ、好天で無風の時は夕方までよしずを外しておくのが「八戸土地にて宜也」としている
- ・ 江戸では100本植えて花壇に植えられる菊は13・4本⇔八戸（「御国」）では4・5本出るか出ないか
- ・ 手入れ：肥料や竹の組み方のほか、茎が太くならないようにたびたび植え替えることが「秘伝」  
江戸＝最初は花壇の外の南に面した場所に植え、花が半開きになるとさらに庭前の花壇に移し植える／、

仮植の時に竹を組み、竹のまま移して本植する「駕籠植」がある

江戸＝花の咲く時期の植え替えはせず、花が半開きの頃に竹を組み替える

- ・仕立方：「江戸作方と云、御国風とは別段」
- ・開花時期の手当：江戸＝「油障子」の利用⇔江戸＝「油障子ハ致かたく、霜囲まで」「世間へ対し遠慮」
- ・夏菊の作り方：江戸＝翌年に植える場所を秋から施肥し、冬から菊を植えて春からすぐに枝立て  
⇔江戸は「寒国」であまり開花は早くならないので、普通の方法が江戸の土地にあう
- ・花が終わったあとの作業：江戸＝花を取ったあとに別の場所に植え替え、馬肥を大量に入れておくと翌年の芽出しがある⇔江戸＝「遠国」のため、掘り返して移しても芽は出ないので、そのままの場所で木の葉をかけておいておく
- ・江戸独自の黄色い小菊の品種「くりから鬼一口」（別名「八月菊」）：かつて公用で根を運んで育成したところ、渋谷屋敷の土地に合わずうまく育たなかったが、宝暦年間に徳武が江戸勤務の際に 15 本を持ち込んで成功し、屋敷外にも広まった

## 2 「植木扱書」

- ・河内屋（橋本）八郎兵衛 嘉永 2 年（1849）の酒屋仲間 八日町 現・江戸酒類株式会社 八鶴  
天明 6（1786）年 呉服屋→酒造、質屋
- ・「右江戸御屋敷御庭師五左衛門よりの伝書、森重大夫様より御伝受 嘉永五壬子年五月吉日」
- ・「駿河菊 植替之時節、五月中頃・八月中頃、植土ハ赤土へ油かす、又ハほしかを少々入れ、白めなる荒砂ヲ多ぐ入まぜ合ニ而植付、水ハ四五日目位仕、長雨の節ハ取こみ候而宜、尤井戸水ハ悪しぐ、雨水取置候か、又ハ風呂の水宜、肥しふん類ハ悪しく、置所極日陰、冬ハ土蔵の内宜御座候  
松葉菊 植替之時節、五月・八月、植土ハ赤土堅キかたまりくたき、鉢底へ極あらしきを入、根廻りへ中位入、上へ細きを入、又ハへこを割てまぜ植付ても宜しぐ、水ハ日陰持ニ而四日目ほど、陽地持ニ而二日目位そそぎかけ、長雨の節ハ取こみ、冬ハ土蔵内宜しぐ、肥しハ駿河菊同様」
- ・森重太夫 父九伝治より弘化 3（1846）年 3 月に相続 給人格 4 駄 2 人扶持・・  
嘉永 3（1850）年 3 月 江戸参勤（常御供・小道具頭・御買方・奥向御普請下奉行）～5 年 4 月 29 日 国元着、5 月 1 日家老に挨拶（「御勤功帳」）
- ・10 月 27 日 森九伝治→橋本八郎兵衛殿  
「此中包物添」昨夜江戸表より急御飛脚到着付、悴より御注文之口上下指下候、則御届申、御落手可被下候」
- ・11 月 12 日 森九伝治→河内屋久次郎  
「随而其節段々御申上候通、私頂戴之春木三拾式三ツ？御座候、尤明春川揚ニ相成候上ニ而御渡可申候、右付願上候も如何敷存候得共、此節悴方江為登金付難有被仕置奉存候間、五枚斗内借仕置奉願上候、何れ拝借分ニ者間数も上可申候間、右之趣八郎兵衛様江も■御相談被成下置奉願上候」
- ・9 月 9 日 書状（小宝丸に河八行き植木鉢 3 つ、鉢植 7 つ船積みの通知） 重太夫→（小笠原か）七右衛門（※未見）

## おわりに

参勤交代による伝播／種・鉢植え・道具・技術書／武士→町人／「御国風」と「江戸風」の折衷

※参考文献 岩淵「武士の園芸」（『東京都江戸東京博物館調査報告書』第 29 集、2015 年）